



Title	ウランバートルの今を生きるシャーマンたち（下） : 活動形態の変化と潜在的可能性について
Author(s)	藤井, 麻世
Citation	モンゴル研究. 2011, 26, p. 2-33
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102359
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

《論 文》

ウランバートルの今を生きるシャーマンたち(下)

ー活動形態の変化と潜在的可能性についてー

藤 井 麻 世

Ⅲ ウランバートルで活動する
シャーマンたち

1. シャーマンのライフヒストリー

(1) ライフヒストリーを書く目的

第1章でモンゴルのシャーマンの概要を述べた。だが第1章だけでは、どのような人がシャーマンになるのかということが、分かりづらいと思う。シャーマンというと、何か常人とは違う特別な人物を想像される方も多いのではないだろうか。

筆者自身、呪いをかけられるとは思わなかったものの、実際に会うまでは、シャーマンに対して神秘的で気難しそうなイメージを持っていた。しかし、筆者がお話を伺ったシャーマンのほとんどは、ごく普通の方々であった。シャーマンといえども、人間なのだという当たり前のことを強く感じた。そこで1例ではあるが、シャーマンのもっと内面的な部分や素顔を紹介し、リアルにシャーマンを捉えていただくことを意図して、ライフヒストリーを書いた。

(2) インタビュー対象の説明と、出会いの経緯について

ブリヤートのシャーマン、ガルバドラフ・ザイラン(26歳)が対象である。彼を紹介して下さったのは、2005年のモンゴル留学中に通っていた学校のX先生だ。X先生も心臓を悪くし、彼にお祓いの儀式を行ってもらったことがある。病院で診察を受けても原因不明だったその病状は、知

り合いの女性による呪いが原因だったそうだった。ガルバドラフ・ザイランにお祓いしてもらったところ、翌日劇的に病状が回復した。それ以来、彼のことを優秀なシャーマンだと非常に信頼している。

筆者が初めてガルバドラフ・ザイランと会ったのは、2005年の11月10日である。この日にX先生と彼の家を訪れ、定期的に行っているユステイの儀式を見学させていただいた。その後授業に来ていただき、インタビューを行った。お互いの年齢が近かったこと、彼が気さくな人柄であることから、現在まで頻繁に連絡を取り合い親しくさせていただいている。

(3) 実施方法

アプローチ方法は質的研究、つまり事例を考察し、結論を導く方法である。調査手法は個人面接法(インタビュー)を選択した。ただ、改まった形式のインタビューは最初の1回、つまり2005年11月14日に行ったものだけだ。その後、連絡を取り続け、2006年7月26日から9月28日にかけて長期間行動を共にする中で、様々なお話を伺ったというのが実情である。そして重要だと思ったことを書きとめ、資料2でインタビュー形式にして下記①～③の順番にまとめた。書いたものは本人のチェックを受け、間違っている部分を訂正した。

- ①どのような人がシャーマンになるのか? 詳しいいきさつと、心境の変化。また家族構成など、本人の背景について。
- ②どのような活動をしているのか? 田舎での儀

式、特別な儀式は行うのか？シャーマンの仕事について。

③ウランバートルで活動するシャーマンの特徴。

外国との関わりや、本の執筆活動、講演会。他のシャーマンとの関わりについて。

(4) ガルバドラフ・ザイランのライフヒストリー分析

ガルバドラフ・ザイランは14歳のころから巫病の症状が現れ、20歳でシャーマンになった。シャーマン歴は6年である。ヘンティ県ダダル村出身で、大学へ入学した19歳のころからウランバートルで生活している。資料2に詳しいライフヒストリーの年表とインタビュー内容をまとめたので、まずはそちらを読んでいただきたい。本項では資料2を補足し、また必要な部分を資料2から引用しつつ、ウランバートルで活動するシャーマンの特徴に着目した分析を行う。

ウランバートルは人口が集中し都市化、情報化が進んでいる。ガルバドラフ・ザイランもインターネットカフェを利用して筆者と連絡を取ったり、他国のシャーマンについて調べたりしている。彼は、携帯電話を所持しており、相談者とは主に携帯電話で連絡を取っている。以前の相談者から電話番号を聞いたカザフスタンの記者が、インタビューを申し込んできたこともあった。友人や知人から、数珠で占ってアドバイスして欲しいと電話がかかってくることも多い。

また、トーライン・トヴルグーン・ナーダム¹⁾に参加して以来、外国人や他の民族のシャーマン、シャーマンの研究者や新聞の発行者、新聞記者など多くの人と知り合い、活動の場が広がった。トーライン・トヴルグーン・ナーダム(以下T祭とする)とは、ドイツ人 Bernhard Wulf 氏が主催する現代音楽・舞踊祭のことである。1999年から開催されており、2006年で7周年になる。いろいろな国の歌手、ダンサー、音楽家が集まり、

フブスグル、ゴビなどの地方で開催された。ガルバドラフ・ザイランは2005年、2006年に参加した。T祭の趣旨は自然に祈りをこめて演奏することだそうである。そのため、山の上や湖の側など自然の景観が美しい場所で開催されている。

ガルバドラフ・ザイランは、シャーマンについての新聞を発行している方とT祭で知り合い、ウランバートルに帰ってから新聞記事を書くのを手伝ったそうだ。2007年1月17日に電話をかけた時は、第3号も手伝うことになったと話していた。相談者との連絡の取り方をみても分かる通り、都市化、情報化の進んだウランバートルに在住していることが、彼のシャーマンの活動に大きく影響している。

また、ガルバドラフ・ザイランはモンゴルのシャーマンだけではなく、他の国のシャーマンにも興味を持っている。

24. 他の国のシャーマンにも興味がありますか？日本にもシャーマニズムの伝統があるんですよ。

G：へえ、面白いですね。とても興味があります。日本のシャーマンと一緒に儀式をしたら、どんな感じがするでしょう？他の国のシャーマンにも、興味を持っています。ネイティブアメリカンのシャーマンについて、インターネットで調べたりしました。

25. 日本のようなよその国でも、儀式をすることはできるのですか？

G：ええ。オンゴッドはどこへでも行くことができますからね。ただ湿気が多くて、太鼓が湿ってしまうようなら、難しいです。きちんと乾かして、いい音を鳴らさないとイケないんですよ。この問題さえなければ、土地神、水神というのは共通しているので、儀式を行うことができます。

上記2つの枠内は、資料2からの引用である。後に筆者が沖縄のユタや東北地方のイタコの話をする「ぜひ会ってみたい、そして機会があれば日本で儀式を行ってみたい」と語った²⁾。

このように外国でも儀式を行うことができるという点が興味深い。土地神には国の区別が無いのだ。場所ごとに特徴はあっても、土地神という点では変わらないと考えている。

2006年9月、筆者は帰国直前にガルバドラフ・ザイランに儀式を行ってもらった³⁾。確かにその際、彼のオンゴッドは日本の産土神とコンタクトを取り、筆者を守るようお願いしてくれていた。自然信仰は世界中に存在する普遍的な信仰だ。それと密接に関わるシャーマンもまた、国境を越えて受け入れられやすい存在ではないかと思う。

シャーマンの仕事は、筆者が想像していた以上に苦労が多いものだと感じた。まず、問題なのがシャーマンに対するイメージの悪さである。人々をだます、呪いをかけるなどガルバドラフ・ザイランでさえ、自分になる以前はシャーマンに対して良い印象を持っていなかった。これは社会主義時代に形成されたイメージなのだろうか。特に最初は、友人はおろか親戚にさえ理解されず苦労したようである。

次にあげられるのは、身につけるものや儀式を行う時にお金がかかるということだ。例えば服ひとつを取っても、さまざまな飾りをつけるため手間とお金がかかる。月に2、3度行われるユステイの儀式の場合は、彼がお供え物を用意する。1度の儀式で、5000～8000Tg(約500～800円)かかる。相談者が来ればお布施を頂くこともあるが、金額が決まっているわけではなく、収入が不安定である。身体への負担が大きいことも問題だ。儀式が7～8時間にわたり、2本のアルヒ(ウオッカ)を空にしたこともある。普段は吸わないタバコも吸うし、非常に体力を消耗する。

このような事情から、彼はシャーマンの仕事

を人助けであるという。最初はよく意味が分からなかった。お布施をもらって生活しているのだから、生活の手段ではないのかと思っていた。だがこのように身を削って行う仕事であるため、人助けというのかと理解するようになった。

また、現在ガルバドラフ・ザイランは、別の専門を身につけるため大学へ通っている。

シャーマンは彼の天職であるため、一生続けてゆく。シャーマンを辞めることはない。だが、シャーマンとして儀式を行うことを、生活の手段にするつもりはないという。下記の2つの枠内は、いずれも資料2から引用した内容である。

19. 今、何か他の仕事をしていますか？

G：いいえ。仕事はなかなか見つかりませんね。

(中略) 今の収入源はシャーマンの儀式を行った時に頂くお布施だけです。でも、このままではいけないと思っています。2006年の9月から夜間の学校に通い始めました。2年間のコースです。学校で会計、経済の知識を身に付け、1年目からは実際にお給料が低くても会社で働いて、経験を積みたいと考えています。その後卒業すれば、経験もあるし、専門もあるということで、もっと良い仕事に就くことが出来るでしょう。

21. 他のシャーマンのように、センターを組織してシャーマンの仕事だけで生活しているとは思えないのですか？

G：いいえ、それは考えていませんね。センターを組織するというのは、シャーマンをビジネス化しているような気がして嫌なんです。そういう人たち(センターを組織するシャーマンたち)を否定するつもりはありませんが、私自身はそう思っています。

このように、別の専門を身につけ仕事を探そうとしていることから、ガルバドラフ・ザイランがお金儲けを目的としていない事は明らかだ。筆者はオンゴッドの存在や、憑霊という現象について証明することはできない。だが、ガルバドラフ・ザイランと話をし、彼に救われたと感じる人から話を聞き、私自身も儀式を行ってもらった結果、シャーマンには確かに人を癒す力があると考えられるようになった。次節では、彼のもとを訪れた相談者について述べる。

(5) ガルバドラフ・ザイランを訪れる相談者

本項では、ガルバドラフ・ザイランを訪れた相談者の、相談内容の分析を行う。資料3に、筆者が儀式に同席して相談者にインタビューを行った数例のケースと、ガルバドラフ・ザイランから聞き取ったケースを載せたので、まずはそちらを参照していただきたい。

ガルバドラフ・ザイランの場合、センターを組織しているわけではないので、相談者は友人や親戚、故郷のダダル村から来た人、知り合いから聞いた人という場合が多い。

資料3では、相談を最初の内容で便宜的にA～Eのカテゴリーに分類した。カテゴリーAは病気関係の相談、Bは商売・金銭関係の相談、Cはお祓い・祈祷関係の相談、Dはシャーマン関係の相談、Eはその他の相談である。日付や場所の記入がないものは、ガルバドラフ・ザイランから聞き取ったケースである。対象者は、ガルバドラフ・ザイランを訪れ助言や祈祷を求める相談者で、なおかつウランバートルに在住しているモンゴル人に限定した。以下で資料3をもとに相談内容の分析を述べる。

カテゴリーA、病気関連の相談は非常に多い。背景にある医療事情を考えると、無理もないと思われる。医者に行っても原因不明だった、治らなかったなどのケースが目立つ。この場合、患者は

不安を抱えており、何らかの説明を必要としている。そのため、儀式を行ってもらうことは、心の面で支えとなるようだ。病院へ行けというアドバイスがあることも興味深い。病気が全てお祓いで治るとは限らないということを示している。だが、X先生のように、お祓いによって病気が治ったのだと信じる相談者もいる。また、ガルバドラフ・ザイランは、師匠のシャーマンからマッサージの技術も習っており、施術を行うこともある。

カテゴリーBの仕事がうまくいかないという相談も非常に多い。筆者が見聞きしたケースでは、単に商売繁盛を祈って儀式をしてもらうのではなく、具体的にこのように仕事がうまくいかないからアドバイスが欲しい、お祓いをしてほしいという相談ばかりであった。相談者が、切実にアドバイスや効果を求めていることがうかがえる。外国に出稼ぎに行くため、うまくいくようにしてほしいという相談も多く、世相を反映している。

また前提として相談者が幽霊、呪い、神など目に見えないものの存在を信じているということがある。そして、その悪影響を恐れている。例えば、資料2のC-1の女性は私の知人で、儀式の場に同席させていただいた。彼女はこれまで娘のことが気に入り、さまざまな占い師やシャーマンに相談していた。ガルバドラフ・ザイランに相談し、儀式を行ってもらった後で感想を聞くと「彼は、きちんと原因を説明してくれたからとても良かったの。納得したし、安心したわ」と話した⁴⁾。その後、家のお祓いも彼に依頼したそう。

もうひとつ、C-5の友人男性のケースでは、他人の妬みを非常に恐れていた。そのためガルバドラフ・ザイランによると、車を買う前から儀式を行ってもらう約束をしていたそう。そして車を買うやいなやガルバドラフ・ザイランのもとを訪れ、儀式の際、車にお守りのハタク(青い布)をつけてもらった。終わった瞬間に「ああ、これでやっと大丈夫だ。よかった!」と言ったそう。

このように、シャーマンに儀式を行ってもらうことは安心感を与える効果がある。ただし相談者が納得できるように説明できるか、ということも重要である。

カテゴリー D は、正真正銘シャーマンにしか出来ない仕事だといえよう。D-2のケースでは、半年ほど前にシャーマンになったばかりの女性（ガルバドラフ・ザイランと同じブリヤート族）の家へお邪魔し、太鼓に力を吹き込むという作業を行った。シャーマンになって日が浅いため、破れてしまった古い太鼓の処置や、新しい太鼓をどうすればよいのか分からなかった。ガルバドラフ・ザイランは彼女に代わって新しい太鼓を叩き、彼女のオンゴッドを呼び出して太鼓に力を吹き込んだ。そして、自分なりの精霊を呼び出す歌（メロディ）を見つけていくようにアドバイスをを行った。

カテゴリー E その他のケースでは、裁判に勝ちたい、結婚の時期を教えて欲しいなど相談内容が多様化していることがわかる。その一方で、悪い夢をみた女性のケースなど古典的な相談例もあり、興味深い。

2. 組織に所属し、活動するシャーマンたち

(1) 調査の目的

ウランバートルでシャーマンたちは、どのような活動をしているのかを明らかにするため、この調査を行った。その中でも、センターに所属し、活動しているシャーマンの実態を調査することが目的である。

(2) インタビュー対象と実施方法の説明

調査対象は、組織に所属し活動しているウランバートル在住のシャーマンたちである。ケース1と5のシャーマンは、ガルバドラフ・ザイランの知り合いである。ケース2～4のシャーマンは、彼の知人の情報をもとに探し訪れた、初対面の

シャーマンだ。

アプローチ方法は、質的研究とする。調査手法については個人面接法（インタビュー）を選択した。研究視座はケーススタディである。

この調査は、資料2のガルバドラフ・ザイランと共に、2006年9月18日から26日にかけて実施した。ただしケース5のボヤンバドラフ・ザイランについては、2005年12月4日にガルバドラフ・ザイランとセンターを訪れ、一度インタビューを行っている。

まず下記①～④を明らかにするための質問をメモしておき、聞き取り調査を行う際に活用した。だが、会話の流れを重視した（自由面接法）。下記①～④は筆者が関心を持っている項目である。

- ①どのような人がシャーマンになるのか？詳しいいきさつと、家族構成などその人の背景事情について。
- ②所属しているのは、どのようなセンターか？その目的と活動内容、料金体系など。
- ③どのような人が訪れるのか？田舎での儀式、特別な儀式は行うのか？シャーマンの仕事について。
- ④ウランバートルで活動するシャーマンの特徴。外国との関わりや、本の執筆活動、講演会。他のシャーマンとの関わりについて。

また、録音を試みたが、警戒心を強めてしまう恐れがあったため、書き取り調査に変更した。そして後で筆者が聞き書きした情報と、ガルバドラフ・ザイランが聞いた情報を照らし合わせて確認した。この調査では、ガルバドラフ・ザイランのように、一人一人に深く関わることができなかった。ケースの数も多くはない。更なる調査が必要だということを踏まえつつ、共通する点について分析を行う。

(3) センターで活動するシャーマンたち

調査を行った5人のシャーマンのインタビュー内容を、資料4にまとめた。まずはそちらを読んでいただきたい。本項では資料4をもとに、5つのケースの分析を行う。

まず5つのケースに共通している点は、センターがNGO団体であることだ。そして料金は、基本的に相談者が決めるということも挙げられる。ケース4、ケース5のようにかなりきちんとしたシステムのセンターと、ケース2のように個人経営に近いセンターがある。また、どのシャーマンも夏に故郷や地方へ行って自然祭祀儀式を行っている。ケース3のガリンダウ・オッドガンは、山の祭祀儀礼を行うことがシャーマンの最も重要な仕事だと答えている。そして、相談に訪れる人々は主に病気である人、心配事を抱えた人々である。

次に、ウランバートルで活動するシャーマンの特徴に着目しながら、個々のケースを見てゆきたい。

ケース1のエンフバヤル・オッドガンが所属するセンターは、シャーマンの研究、そして相談者との出会いの場を広げることを目的としている。

モンゴルのシャーマン、シャーマニズムについて書かれた新聞“Босоо Хөх нөмрөтгөн”(2006 No1, No2)によると2005年9月7日、8日に、ゴロムトセンターの企画で、アルハンガイ県ツェンヘル村の田舎にあるソウラカ山の祭祀儀礼が行われた。この儀礼には韓国人シャーマンの5組合の代表者13人と、組合連合会会長が参加した。ゴロムトセンターは独自のHPを持っている。そこに山の自然祭祀儀礼を行うという情報を掲載したところ、韓国のシャーマンのセンターが興味を持ってコンタクトを取ってきたそうだ。

エンフバヤル・オッドガンはゴロムトセンターの代表であるスフバット氏に招待され、この企画に参加した。彼女は、「外国のシャーマンと儀式

を行う機会なんて、めったにないでしょう。とても興味深かったわ。機会があれば私も外国で儀式を行ってみたいものね⁵⁾」と語った。

ガルバドラフ・ザイランと同様、オンゴッドや土地神に国籍はないため、外国でもモンゴルと同じように儀式ができると考えている。国の違うシャーマン同士が反発することもなく、共同で儀式を行うという点も興味深い。シャーマンの国際交流が実現しているのである。

ケース2のバルジンナム・ザイランは、社会主義時代を経験したシャーマンである。当時は表立ってシャーマンの活動をするのができなかった。代々続くシャーマンの家系であり、社会主義時代の後、本格的に活動を始めた。悩みを抱える人の相談に乗り、助けになりたいという気持ちからセンターを設立したそうだ。センターがあれば、相談者が訪れやすいと考えた。「宗教の自由が認められた今は、偽者から本物までさまざまなシャーマンがウランバートルで増えているようだね⁶⁾」と語った。

民主化(1992年)の影響により、社会主義時代に比べて、シャーマンとしての活動が大幅自由になった。調査することは出来なかったが、ウランバートルにはもっと多くのシャーマンのセンターがあるし、個人で活動する者も多いと、複数のシャーマンたちから聞いた。これは、信教の自由が認められたことが影響していると考えられる。

バルジンナム・ザイランはシャーマンについての本を執筆しており、研究者の間でも有名なシャーマンである。本を読んだ人が相談に訪れることもあるそうだ。2006年の夏にチンゲルテイ国際シャーマンシンポジウムで発表を行うなど、対外的な情報発信活動を行っている。このような活動を行っている場合、相談者は事前に情報を得ることが出来るため、シャーマンを訪れる際の抵抗感が和らぐのではないだろうか。

ケース3のガリンダウ・オッドガンは、シャーマン

マンを統一し、人々の偏見からシャーマンを守るために組合を組織した。組合を組織することで、シャーマンを団結させ、権利が守られるようにしたいと考えたそう。あらゆる相談者に対応できるようにすることも、目的の一つである。また、シャーマンについての本の執筆を考えている。

ケース4のナラントヤ・オッドガンが所属する組合は会員制であり、シャーマンの証明書が発行されるなど、かなり体系的な組織である。「今、ウランバートルにシャーマンが増えています。きちんとしたシャーマンもいるけれど、詐欺師のようなシャーマンもいるでしょう？ シャーマンの儀式がショーのように思われて、印象が悪くなることを私たちは心配しています。そこできちんとしたシャーマンを、効率よく相談者に紹介するためにこの組合が組織されたのです⁷⁾」と彼女は語った。

やはり、シャーマンに対する偏見は存在するようだ。彼女自身もシャーマンになるまでは、シャーマンに対して悪い印象を持っていた。だが今は、そのような偏見を無くしたいと考えている。

組合を組織し、シャーマンを相談者に効率よく紹介するというのは、非常に合理的で、近代的な方法である。だがその後、相談者は紹介されたシャーマンのもとを訪れ、昔からの方法で儀式を行ってもらうのである。シャーマンと相談者の出会い方に変化があっても、シャーマンが行う仕事自体は変わっていない。

また、この組合では外国との交流を重視している。世界中のシャーマンとつながり、研究することも目的のひとつだそう。センターにはロシア、中国、イタリア、ドイツなど外国人のシャーマン約20人が所属している。彼らは自国ではなく、モンゴル式のシャーマンたちである。夏になるとモンゴルを訪れ、地方で自然祭祀儀礼を行う。なぜ外国人がモンゴルのシャーマンになるのかと質問した。すると、「チンギス・ハーンの時

代に遠征を行ったため、今のドイツやイタリア、中国のほうにもモンゴル人の血が混じったことがあったでしょう。その中にシャーマンの血筋の者がいたのだと思います。遠い先祖にモンゴル人シャーマンがいたため、モンゴル式のシャーマンになるのではないかと私は考えています⁸⁾」という回答であった。

事務所の中には多くの写真が貼られ、その中には代表者であった故ツェレン・ザイランがイタリアを訪れている写真、他国のシャーマンと交流している写真、田舎で儀式を行っている写真などが展示されている。調査期間中も、組合に所属するシャーマンが1人、アメリカへ行き儀式を行っていた。

ケース1同様、シャーマンの国際交流活動が行われている点が非常に興味深い。残念ながら外国を訪れ、儀式を行ったシャーマンから直接お話を伺うことは出来なかった。だが、外国の地で儀式を行ったことから、やはり土地神やオンゴッドに国境はないという考えを持っていることが推測される。

ケース5は、ボヤンバドラフ・ザイランが所属するセンターである。代表はジャンバドルジ・ザイランだ。ジャンバドルジ・ザイラン、彼の娘、ボヤンバドラフ・ザイランの3人は2005年のT祭に参加している。その後、ジャンバドルジ・ザイランはT祭の主催者に招待され、ドイツで儀式を行ったことがあるという⁹⁾。また本の執筆も行っており、著書にはドイツを訪れた時の写真や、ネイティブアメリカンのシャーマンと一緒に撮った写真が掲載されている¹⁰⁾。

一方、ボヤンバドラフ・ザイランは、センターを訪れる人々に対してお祓いをする。週末にセンターを訪れる人々(集団)に対して、一度にお祓いを行うという活動だ。また、2005年の夏はゴビ地方で伝統的な雨乞いの儀式を行った。

民主化以降、信教の自由が認められ、ウラン

バートルで活動するシャーマンが増えた。活動が活発になり、センターや組合も組織されるようになった。シャーマンがセンターを組織する目的は、相談者と効率よく関わり相談に乗ること、そして対外的にシャーマンのことを理解してもらうことの2つに集約される。

センターに所属しているシャーマンは、相談者を受け入れる間口が広い。ケース4のように繁華街の綺麗なオフィスの一室にあれば、相談者も訪れやすい。だが、その反面、商業化された偽者のシャーマンだと誤解される恐れもある。

ケース1、4、5では、ガルバドラフ・ザイランと同様に携帯電話を駆使していた。またケース4のオフィスには、インターネットに接続されているコンピューターが設置されていた。今回の調査対象ではないが、ゴロムトセンターというシャーマンのセンターは独自のHPを持っている。そしてHP上に自然祭祀儀礼についての記事を掲載したことがきっかけで、韓国のシャーマンとの交流が生まれた。このように、近代的な情報通信技術手段を積極的に利用し、情報発信を行っている点が特徴的だ。

また、大抵のセンターに外国人の研究者が訪れていた。外国人がモンゴル式のシャーマンになるというケース4の例や、外国へ行き儀式を行うシャーマンの例などが見られることから、シャーマンの活動範囲が国際的になり、外国人との関わりが増えていることが窺える。

ウランバートルで活動するシャーマンと、昔ながらの活動形態に近い地方在住のシャーマンを比べると、前者には上記のような活動形態の変化が見られる。だが、基本的に儀式を行う時は個人であり、占いや儀式を行うことで相談者の悩みを解決する、地方で自然祭祀儀礼を行うなど、シャーマンの活動の核である部分は変わっていない。

Ⅳ シャーマンの活動形態の変化と潜在的可能性について

1. シャーマンの活動形態の変化と役割

(1) シャーマンの活動に影響を与えた4つの要因

本項では、第3章の分析を踏まえ、シャーマンの活動形態を変化させた4つの要因についてまとめる。4つの要因とは、1. 社会システムの変化、2. 都市化、3. 情報化、4. 国際化のことである。これらの要因は、それぞれが深く関わり合っている。

まず1. 社会システムの変化だが、これは、1992年に社会主義から資本主義へと社会システムが大きく変動したことを指す。民主化によって信教の自由が認められたことが、シャーマンを名乗る者の増加につながった。また、本の執筆やセンターの組織など、積極的な活動が許されるようになった。

次に2. 都市化の影響によりウランバートルに、人口が集中するようになった。相談者は民族を問わなくなり、数も増えた。このような状況で活動を行う中、効率よく相談者と出会うことを目的として、センターを組織する者も現れた。

3. 情報化は、都市化による影響の一つとも言える。都市化によって情報通信のインフラが整備され、シャーマンも情報通信技術を駆使するようになった。その結果、相談者や外部とのコンタクト方法が容易になった。またシャーマン自身が本を執筆する、新聞などのインタビューに答える、講演活動を行うなど情報発信を行うようになったことも挙げられる。

そして4. 国際化の影響により、多くの外国人がモンゴル国内に入ってくるようになった。モンゴル人も出稼ぎや、留学、観光などを目的に、多くの人が外国へ出て行くようになった。その結

果、外国人との交流が進み、イタリアやアメリカ、ドイツで儀式を行ったシャーマンの例や、韓国のシャーマンと合同で儀式を行うという例が見られるようになった。また、2000年の4月に、ダルハドのバトバヤル・オッドガンは、インドで行われた世界宗教者大会に参加している¹¹⁾。このように、シャーマンの活動が国際的な広がりを見せていることが分かる。

(2) なぜシャーマンの数が増えているのか

第3章1節の(5)でガルバドラフ・ザイランを訪れる相談者の相談内容について分析を述べた。その結果から、筆者はウランバートルの社会問題が相談内容に反映されているのではないだろうかと考える。例えば、病気の相談が多い点については、医療事情の悪さが関係しており、仕事、お金に関する相談が多いことの背景には経済格差、貧困問題があるのではないだろうか。

相談者たちは、神や幽霊といった霊的なものの存在を信じ、妬みといった負の感情や、呪いの悪影響を恐れている。特に、他の人より少し豊かになると、妬まれるのではないかと恐れる。そのため、病気や仕事の不調といった具体的な問題が発生した時、妬み、呪いが悪影響を及ぼしているのではないかと考え、不安になった結果シャーマンを必要とするのではないだろうか。そしてこれらの要因が、シャーマンの数の増加につながっているのではないだろうか。

だが、相談者の相談内容と社会との関わりについて本格的に論じるには、まだケースが不足している。証明するには、更に多くの相談者に対して、社会的背景にまで踏み込んだ調査を行う必要がある。

(3) シャーマンの役割について

現在のシャーマンは部族的な共同体に属していない。そのため、昔のように部族の指導者や、戦いの参謀といった、限られた集団を前提とした役

割は消失した。

現在ウランバートルで活動するシャーマンの役割は、大きく2つに分けられる。一つ目は、心と体を癒すヒーラーとしての役割だ。占いをして相談に乗る、呪いや幽霊のお祓いを行う、病人の魂を体に呼び戻すなどの方法がある。例えば、悪い夢を見た、幽霊を目撃したなどの理由で、不安を抱える相談者がいる。その場合、シャーマンは医者には補いきれない心の部分をケアする役割を果たしていると言える。また、体に対しては、お祓いに加え、マッサージの施術を行う場合もある。

もう一つの役割は自然祭祀儀礼をつかさどる祭司である。地方で山の祭祀儀礼や雨乞いを行うことは、シャーマンをシャーマンたらしめている重要な役割だと思う。

また、本の執筆、講演活動を行うなど、情報発信者としての役割を担うシャーマンも出てきている。

このように変化した部分、発展した部分はあるが、ヒーラーと祭司という基本的なシャーマンの役割は変わっていない。次節では、この2つの役割を持つシャーマンの潜在的な可能性について述べる。

2. シャーマンの潜在的な可能性について

(1) シャーマンに興味を持つ外国人

調査を行っていくうちに、特に外国人がモンゴルのシャーマンに興味を持つ場合が多いことを知った。

例えばT祭はドイツ人の主催によるものであるし、資料2ケース4のセンターでは、シャーマンが外国で儀式を行うほか、外国人がモンゴル式のシャーマンになるという例も見られる。2005年の夏フブスグル県を旅行し、ダルハドのヨウラー・オッドガンのもとを訪れた際、直前に韓国の学生集団が訪ねてきたという話を聞いた。首都から遠く離れ、観光客もめったに訪れないような

場所を、研究者でもない学生の集団が訪れたと聞いて非常に驚いた。またガルバドラフ・ザイランのもとを、筆者の友人や知り合いの日本人が少なくとも8人は訪れた。だが、筆者は彼らに詳しくシャーマンのことを話したわけではない。中には興味を示すと思わなかった人もいて、意外に思った。2007年1月7日にはガルバドラフ・ザイランと電話で話をした。その日彼はユステンイの儀式を行ったのだが、そこに、X先生がドイツ人の友人を連れてきたそうだ。そのドイツ人女性は特に相談事があったわけではなく、シャーマンが儀式を行っている様子を見てみたかったそうである。

外国人は客観的にシャーマンをとらえるため、偏見が少ない。ウランバートルでは、シャーマンのダンスが民族舞踊コンサートの演目として演じられており、絵葉書やシャーマンの人形も土産物として売られている。シャーマンに興味を持つ外国人は、例えばモンゴル相撲の力士と同様に、文化的に興味深く感じている面があると思われる。

だが、なぜ相撲の力士ではなくシャーマンに興味をもつのか。また、自らがシャーマンになるほどの熱意を持つ者も存在する。果たして彼らの情熱はどこから来るのだろうか。次項では、これらの疑問に対する仮説理論「シャーマンは、自然や故郷とのつながりといったものと切り離され、満たされない思いを抱える人々を癒す可能性がある。」を筆者の体験から提示する。

(2) 仮説理論の提示ー筆者の体験からー

2006年の8月、新しくシャーマンになる人のチャネルを行うため、ガルバドラフ・ザイランらと共にダダル村の方まで旅行した¹²⁾。長期間行動を共にして強く感じたこと、それはガルバドラフ・ザイランをはじめ、シャーマンにとっては、土地の神やオンゴッドが紛れもない現実として存在しているということだ。空気が目に見えなくて

もそこに存在するように、自然神、オンゴッドなどもシャーマンにとっては実在しているのである。

例えば、ガルバドラフ・ザイランは旅の節目で、土地の神や川の神に感謝とあいさつの意を込めて捧げものをする。また、子どもが休憩中にゴミを捨てると、「そんな風に考えなしにゴミを捨ててはいけない。土地の神に失礼だ。」と叱る。それだけ、自然神を身近に感じているのだ。自然を汚してはいけないから、ではなく、土地の神に失礼だからという理由に心を動かされた。だが、筆者は最初、自然神の存在を信じていなかった。自然信仰の考え方に共感してはいたが、土地の神が存在するのだと実感していたわけではない。自然と切り離された現代人の典型と言えるかもしれない。

旅の途中、新しくシャーマンになったタイワン氏が、バイクで先にある川の様子を見に行っていたことがあった。ところがある場所で突如意識を失い、バイクで横転してしまった。幸い大きな怪我もせず、同行した人と無事に帰ってくることができた。翌日、全員でその場所へ来た時、土地の神に捧げものをするため停車した。すると、一緒に連れてきていた羊がその場所に差し掛かったとたん、突如息絶えたのだ。皆、土地の神が羊の命を奪ったのだと話し、いつもより更に丁寧にシミナルヒ(牛乳の蒸留酒)を撒き、祈りを捧げた。

このような経験を通じて、筆者もいつしか土地の神の存在を身近に感じるようになっていた。シャーマンのように土地の神の姿が見えるようになった訳ではない。だが、ガルバドラフ・ザイランたちと行動し、シャーマンが自然の神々と真摯に接する姿を見ているうちに、その存在を身近に感じるようになったのだ。山も川も、土地も、筆者から切り離されたものではない。人間と同じように時には怒りもする神々が宿っていると感じるようになった。またそのように感じることで

る自分がうれしくもあった。そして、シャーマンはこのように人と自然をつなぐのかと感じたのである。

また、帰国間際に「道を整える」といって、仕事や将来の出来事が順調に進むよう、ガルバドラフ・ザイランに儀式を行ってもらった¹³⁾。その際、ガルバドラフ・ザイランのオンゴッドは、筆者の産土神とコンタクトをとり「この子をよろしく頼む」とお願いしてくれた。ヘンティ県に旅行した時の経験から、日本の産土神の存在を身近に感じ、守ってくれているのだという感謝の気持ちや、安心感を覚えた。彼は、儀式を通じてモンゴルのみならず、筆者の故郷の自然(土地神)とのつながりも取り戻してくれたのだ。

儀式後ガルバドラフ・ザイランは、嫌なことや不安に感じる事があれば、ガンガ(お香のようなもの)を焚き、煙で身体を浄化するように言った。お守りをつけている限り、オンゴッドがいつも側で見守っていてくれるから、大丈夫だと話してくれた。

図1は、筆者の経験を図式化したものである。まず自然神や、オンゴッドといった目に見えない存在Aがある。衣食住に不自由せず、農業に携わる方のように、自然の厳しさを体感することもない現代的な環境の中で育ってきた筆者は、彼らの存在を実感することが出来ない。そのため、自然とのつながりを取り戻したい、という満たされ

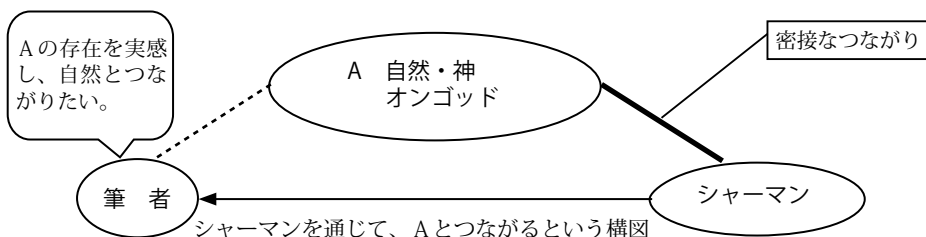
ない気持ちが無意識にあった。そして著者は自然信仰の考え方に惹かれ、またAと密接に関わるシャーマンに興味を持った。そしてシャーマンと関わることを通じて、間接的にAと出会い、その存在を実感した。その時、筆者は自然とのつながりを取り戻したと感じ、癒しが起こったという構図である。

これは筆者の個人的な体験にすぎない。だが、シャーマンに興味をもつ外国人も、モンゴル式のシャーマンになる外国人も、同じような気持ちが根底にあるのではないだろうか。

産業やテクノロジーが発展し、第一次産業に従事する人の数が減り、自然の脅威を身に沁みて感じる機会も少なくなった。また理由なき殺人など、命や生きていることのリアリティ、自然や動物、人間とのつながりを失い、相手を思いやることを忘れてしまったかのような事件が各地で起こっている。

このような事情を背景に、自然や故郷とのつながりや畏れの気持ちを求め、満たされないものを感じている現代人がある。彼らは、そのような存在を実感してみたい、つながりを取り戻したいという気持ちから、シャーマンに興味を示すのではないだろうか。満たされない気持ちを抱えた人はシャーマンを訪れる。シャーマンは自らが自然神やオンゴッドと密接につながっているため、満たされない思いを抱えた人と、それらをつなぐこと

図1



作成者 藤井

ができるのだ。更に直接的に自然とのつながりを取り戻したいと思う者が、モンゴル式のシャーマンになるのではないだろうか。

(3) シャーマンの潜在的可能性

(2)で提示したのは、あくまで仮説理論である。だが、もしこの構図が多くの人に当てはまるのなら、シャーマンはヒーラー、祭司という2つの役割を通じて、自然や故郷とのつながりを失くし、満たされない思いを抱える人々を癒す可能性があるとと言える。

シャーマンが外国で自然祭祀儀礼や儀式を行うことも、同様の可能性がある。その際、ベースにあるのが自然信仰であるため、国や文化の違いが障害になりにくいのではないか。

外国人に限らずモンゴルの人々も、もっと物質的に豊かになった時、筆者のように満たされないものを抱え、自然や故郷とのつながりを取り戻したいと思うようになる可能性がある。その時、シャーマンが彼らを癒すことに一定の役割を果たすのではないだろうか。

この仮説理論は人間の心の動きについての理論であるため、証明が難しい。だが、質的研究の手法によって検証できるのではないかと考えている。

検証のためには、今回実施できなかったガルバドラフ・ザイランを訪れる相談者に対する調査に加え、シャーマンに興味を持つ外国人や、モンゴルでシャーマンになった外国人に対する調査が必要だ。それも個人の社会的背景や気持ちの変化にまで踏み込んだ、丁寧な調査を行わなければならないだろう。

質的研究の中には、調査を行い、その調査研究から理論を発見し、理論検証のための調査を行う、という循環的なプロセスをとる研究方法¹⁴⁾がある。著者が本論文で述べたのはその最初のプロセスであり、仮説理論の検証は次回への課題としたい。

おわりに

筆者はモンゴルのウランバートル市に留学し、またシャーマンや貧困家庭に対する調査を行った経験から「美しい草原の国」というイメージとは程遠い、モンゴルの現実を目の当たりにしてきた。現在のモンゴルは貧しく、多くの問題を抱えつつも発展しようと努力している状態だと思う。だが、物質的に豊かになった現代人が見失いがちなものを感じた。

モンゴルに惹かれる人達には、共通して感じている魅力があるのではないだろうか。その一つとして筆者は本論文で、シャーマンを通じ自然や故郷とのつながりを取り戻した経験を述べた。だがその他にも、自然の中で生きる知恵や遅しさ、家族の大切さや、人とのつながりの大切さなど多くのことを教わった。どれもシンプルで当たり前のことかもしれないが、特に地方を訪れた際、改めてその重要さに気づくことが多かったように思う。

ウランバートルで、その日を生きることに必死な人々には、奇麗事に聞こえるかもしれない。それでも、どうかそういうものを忘れないでほしいと思う。また筆者自身も見失わずに生きていきたいと思う。

資料2 ガルバドラフ・ザイ ランのライフヒストリー

<年表>

1980年 5月2日アグワーン家の8番目の子どもとして生まれる(下に妹が1人)。

1988年 8歳の時ヘンティ県ダダル村の小/中学校へ入学。

1994年 14歳からひきつけを起こし、意識を失う症状が現れはじめる。

1996年 16歳で、ヘンティ県ウンドルハーンの高校に入学。

1998年 18歳で高校を卒業。

1999年 チンギス・ハーン大学へ入学するため19歳の時ウランバートルへ移住。友人と暮らし始める。大学では、歴史と考古学を専攻する。

2000年 ヘンティ県ダダル村のシャーマンを訪れる。そこで、シャーマンになるべき運命だということを知る。

2002年 大学を休学する。その間、ウランバートルでブリヤートのシャーマンに弟子入りし、精霊を呼び出す歌、太鼓のたたき方、ユステンイの儀式的仕方などを学んだ。また、アルバイトをして生活費を稼いでいた。

2004年 大学に復学する。また現在の師匠と知り合い、弟子入りする。

2005年 6月25歳で、チンギス・ハーン大学を卒業。

2006年 9月から人文大学の夜間主に通い始める。会計、英語、マーケティングマネージャーコースを受講中。現在は、姉の家で暮らしている。姉(37)、もしくは姉の一番上の娘(16)が、儀式の際に準備と通訳を行う。

<インタビューの内容>

表記について・・・数字：藤井の言葉、G：ガルバドラフ・ザイランの言葉である。

1. あなたがシャーマンになったのはいつですか？こんなに若い方がシャーマンなので驚きました。

G：2000年、20歳の時ですね。当時大学1年生でした。今、26歳なのでシャーマンになって6年経ちます。

2. 大学では何を勉強していたのですか？

G：歴史と考古学です。ダダル(チンギス・ハーンの故郷といわれている所)出身なのでチンギス・ハーンに興味があり、この大学を選びました。

3. あなたがシャーマンになったいきさつを説明してもらえますか？

G：14歳のころからひきつけを起こし、意識を失う病気にかかったんです。病院に行き、検査を受けても異常は見つからず、医者診断は「疲れ」。薬を処方してもらってもよくなりません。そこで、何度もラマ僧の所へ連れて行かれました。あるラマ僧には土地神の祟りを受けていると言われ、お経を唱えてもらいましたが、症状は治まりませんでした。

そして、20歳の時、現在同居している姉(37)に連れられ、ダダル村のシャーマンを訪れたのです。そこで、儀式を行ってもらおうと、症状が良くなりました。また、その時シャーマンになるべき運命だと宣告されたのです。

4. シャーマンは自分で望んでなるものではないでしょう？嫌だと思いませんでしたか？

G：(笑いながら)最初は嘘だと思いました。そんなはずはない、嫌だと言ったんです。

でも、好き嫌いの問題じゃないんですよ。そ

れならば意識を失い続け、病気になって死ぬしかないと言われました。選択の余地がなかった。それで、シャーマンになりました。もちろん、最初は戸惑いましたよ。シャーマンについての知識も、フブスグル県のシャーマンについて大学の授業で習った程度でしたし。

私の家はシャーマンの家系です。でも、社会主義時代に家系図が全て処分されてしまったので、シャーマンの家系だということは全く知りませんでした。初めてシャーマンのもとを訪れた時に自分がシャーマンの家系であること、そしてシャーマンになるべき運命だということを告げられたのです。

5. あなたはシャーマンになる前、シャーマンに対してどんな印象を持っていたのですか？

G：たいいていの人と同様、恐ろしい、悪いことをする人々だと思っていました。呪いをかけるのだと。シャーマンのことはよく知りませんでしたからね。

でも、大学1年生の時にシャーマンについての授業を受け、少し印象が変わりました。そして自分がシャーマンになる運命だと知り、ブリヤートのシャーマンについて詳しく勉強し始めてからは、こんな責任の重いことは受け入れられないと思い、シャーマンになることをためらっていました。

※彼は現在も多くの本を読み、シャーマンについて勉強している。

6. 責任が重いというのはどういうことですか？

G：つまり、シャーマンになる人はその一族の「エリート」でなければならないと思ったのです。シャーマンになればきちんとオンゴッド（精霊）を信仰し、彼らと正しく関係を結び、一族全員を正しい道に進ませなければなりません。もしそれが出来なければ、自分だけではな

く一族の者全員に迷惑をかけ、不幸にしてしまいます。責任重大でしょう？ですから、自分はシャーマンになるような器の人間ではないと思い、ためらいました。

7. でも、シャーマンにならなければ死ぬしかないと言われ、シャーマンになったのですね。最初に訪れたシャーマンが、あなたの先生ですか？

G：いいえ。最初の1年は、ウランバートルで別のブリヤート人シャーマンに師事し、太鼓の叩き方や、オンゴッドを呼び出す歌、さまざまなしきたりや習慣を学びました。通訳をしている姉(37)も、一緒に行って儀式の手順と習慣を勉強しました。

最初のチャナル(シャーマンになるための儀式。資料5参照。)では、なかなかオンゴッドをおろせず、しんどかったですね。1年後に最初の先生の元を出て、別のシャーマンに2年目のチャナルをしてもらいました。

シャーマンになってからの2年は、他人を呼ばず、家族だけでユステンイの儀式(旧暦で9のつく日に行う定例の儀式。質問11参照。)をしていました。この2年はまだ慣れておらず、オンゴッドの言葉もはっきり伝えることが出来なくて、大変でしたよ。力試しで、他のシャーマンに軽い呪いをかけられたこともあります。でも、その時は自分で呪いを返すことが出来なくて、他のシャーマンにお祓いをしてもらいました。そうやってユステンイの儀式を行いながら修行を積み、3年目からは外部の相談者を受け入れるようになりました。

8. 衣装や太鼓などは、誰に作ってもらったのですか？どうやって準備したのですか？

G：衣装、帽子、マントは、現在通訳をしている姉が縫ってくれました。太鼓は、シャーマンではないけれど、シャーマンに近いダムディン・

ドリグトイと呼ばれる人に作ってもらいました。太鼓だけは、普通の人ではだめなんです。今の都会にいるシャーマンは、気にしなくなっていますけれどね。

毛皮のデールは3回目のチャナルが終わった時に、あつらえました。先生に教えてもらい、多くの人に縫ってもらったんですよ。杖はまだ準備できていません。靴もです。きちんとしたものをあつらえたいのですが、お金がかかるのですぐには無理ですね。

9. シャーマンになると決めた時、家族や親戚はどのような反応でしたか？

G：そうなの？と思ったそうです。驚いていましたよ。最初は信じなかった。でも、今は信じるようになりました。

※後に彼の叔母と2人で話をする機会があった。「甥がシャーマンになると聞いた時、どう思いましたか？」と尋ねると、「全く信じておらず、あまり良い気持ちはしなかったわ。今はいろいろ話を聞いて、理解するようになったけれどね。」と答えた。

10. そのころ、友人にもシャーマンになると言っていたのですか？

G：ええ。でも高校時代の友人たちは、そんなことをしてはダメだと叱り、私を怖がって避けるようになりました。シャーマンは人を殺す、もしくは嘘つきだと思っていたんです。その後、私が修行を積んで、ダダルの人々に儀式をするようになってからは、仲直りしました。今は大丈夫ですよ。

でも、今でも一般的に、シャーマンに対する印象はよくない。呪いをかける、人を殺すと思っている人はたくさんいます。あなたは勇敢ですね。私が怖くないですか？初対面の人や、あまり親しくない人には、自分がシャーマンであることを明かさないようにしています。その

人が怖がるかもしれないでしょう？だから私は、見るからにシャーマンというような格好、例えば髪を長く伸ばしたり、ヒゲをはやしたり、鏡（シャーマンがお守りとして、首にかけ丸い鏡）を見せびらかすように身に付けたりはしません。出来るだけ普通の格好をするようにしています。道を歩いていて私を見たとき、シャーマンだと分かる人はいないでしょうね。本物の良いシャーマンというのは、恐ろしくなく、親切な人でなくてはいけません。私はそう思っています。

11. シャーマンの仕事について、詳しく教えてください。占いはしますか？

G：占いはしますよ。いつも身につけているこの数珠で。簡単な質問に対しては、数珠で占いをして答えます。占っている最中にインスピレーションが湧いて、いろいろなことがわかります。

それから、毎月旧暦で9のつく日、つまり9日、19日、29日に姉の家でユスンテイを行っています。この日はバイカル湖付近に住んでいた先祖のシャーマンのオンゴッドを全て招き、お供え物でもてなします。また、私の体に憑依させ、お酒やタバコをふるまってもてなします。この日のお供え物は私が用意しています。だから、お金や時間がない時はゾル（灯燭）をともして済ませることもありますね。この時、ものを尋ねに来た人がいれば、その人の質問に答えます。ただこの日は、基本的にオンゴッドをもてなすおめでたい日なので、呪い返しなどの重いお祓いはできません。お祓いが必要な人には、後日改めて儀式を行います。

12. あなたのオンゴッドについて、教えてください。

G：儀式の際に呼び出すオンゴッドは、かつてシャーマンだった私の祖先です。黒い側の

シャーマン、白い側のシャーマンどちらもいます。黒い側のオンゴッドは、お祓いや呪い返しなど重いお祓いを得意としたシャーマンでした。白い側は、医者のオンゴッドと呼んでおり、病気や怪我の治療を得意としたシャーマンです。

私はブリヤート人なので、先祖はバイカル湖の周辺に住んでいました。シャーマンの霊は、亡くなった場所に存在し続けるのです。ですから、儀式の際にはバイカル湖の方に向かって祭壇を準備し、オンゴッドたちを呼び出します。私はウランバートルに住んでいますから、子孫のシャーマンがオンゴッドになった私を呼び出すときは、私の好物を用意して、ウランバートルの方角に祈るのでしょうか。

あ、それからオンゴッドの名前を口外しないでください。他のシャーマンに知られると、勝手に呼び出され、悪用される可能性がありますから。危険なんです。先祖のオンゴッドの他には、ブリヤート族のオンゴッド、つまりブリヤートのシャーマンたちが、共通して信仰するオンゴッドも呼び出します。

13. オンゴッドが憑依した時、あなた自身の意識はどうなるのですか？

G：オンゴッドが私の中に入っている時は、完全に自分の意識がなくなります。

14. では、その間あなたの意識や魂は、どこか別の場所へ行っているのでしょうか？

G：さあ？私にも分かりません。何ひとつ覚えていませんから。私はただオンゴットを憑依させるだけ。全てオンゴッドの力で問題を解決します。私のことを良いシャーマンだとおっしゃってくださいる方もいますが、恥ずかしいです。私自身の力ではありません。褒められるべきなのは、私のオンゴッドたちですから。

15. 人の家で儀式をすることもあるのでしょうか？

先生(彼を紹介してくださったX先生)があなたを家に呼んで儀式をしてもらった後、嘘のように体調がよくなったと話していましたよ。

G：ええ。重い呪い返しや、その場所自体のお祓いなどを行う時は現地へ出向きます。でも、自宅以外の場所で儀式をするのは好きではありません。それこそ「末代まで崇る」というような恐ろしい呪いのかかった家もありますからね。自宅のような清められた安全な場所ではない所で、重い呪い返しを行う時は、私自身も命の危険にさらされます。怖いですよ。でも、私に出来る場合は儀式を行っています。

16. 地方へ行き、土地の神や自然に対する儀礼を行うことはありますか？

G：はい。今年は、トーライン・トヴルグーン・ナーダム(以下T祭とする)で火の信仰儀礼を行いました。これは新しくできたオボーに、オンゴッドを招いて力を吹き込むという儀礼でした。去年のT祭では、9人のシャーマンが集まって、それぞれフブスグル湖の信仰儀礼を行いました。

17. 儀式に対するお礼は、どうなっているのですか？

G：ユステンイの日は、私が儀式に必要なものを用意します。そして質問に来た人は、自分の好きな額のお金をお供えします。ユステンイ以外の日に儀式をする場合は、依頼人に、ミルク、アルヒ(お酒)、ハタク(青い布)、クッキーなど、儀式に必要な物を購入してもらいます。ハタクの上に置く、精霊に捧げるお金は決まっていません。その人の志です。ただ、外に出向いて命の危険にさらされるようなお祓い、呪い返しをする時は、高めにお金を頂きます。そうしない

と、悪い影響が全て私に降りかかってきますから。悪い影響をお金に流す、という意味で高い金額のお金を頂きます。またその場合、依頼人が乗り物を用意してサヒオス(シャーマンの衣装や帽子など)と私を現地まで運ぶ、というしきたりがあります。

18. あなたが考えるシャーマンの役目とは何ですか？

G：シャーマンの役目は人を助けることだと思います。私はシャーマン業を生活の手段にしてゆくつもりはありません。お金はたまらないし、儀式の最中はオンゴッドにふるまうため、自分が飲みたくなくても大量にお酒を飲むことがよくあります。体に悪いでしょう？また、オンゴッドを長時間憑依させていると、エネルギーを奪われて非常に疲れます。

※長い時は7～8時間もさまざまなオンゴッドを憑依させ、処置を行う。訪れた人がいる間は、決して疲れたと言わないが、やはり非常に疲れるそうである。

19. 今、何か他の仕事をしていますか？

G：いいえ。仕事はなかなか見つかりませんね。大学の専門を活かした仕事という、歴史の先生くらいしかない。でも、私は教師の仕事をしたくありません。今の収入源はシャーマンの儀式を行った時に頂くお布施だけです。でも、このままではいけないと思っています。2006年の9月から夜間の学校に通い始めました。2年間のコースです。学校で会計、経済の知識を身に付け、1年目からは実際にお給料が低くても会社で働いて、経験を積みたいと考えています。その後卒業すれば、経験もあるし、専門もあるということで、もっと良い仕事に就くことが出来るでしょう。

20. では、その時シャーマンの仕事は辞めてしまうのですか？

G：それはありません。シャーマンは、私の天職ですから。ユスンテイの儀式は一生続けますし、人から頼まれた時にも、私にできる場合は儀式をしますよ。

21. 他のシャーマンのように、センターを組織してシャーマンの仕事だけで生活していこうとは思えないのですか？

G：いいえ、それは考えていませんね。センターを組織するというのは、シャーマンをビジネス化しているような気がして嫌なんです。そういう人たち(センターを組織するシャーマンたち)を否定するつもりはありませんが、私自身はそう思っています。

22. あなたは、たくさんシャーマンの知り合いがいるのですか？

G：ええ。でも、最初は同じブリヤートの弟子仲間だけでした。その後大学に復学した時、大学の先生がT祭に参加しないかと声をかけてくれたんです。それで、参加してたくさんの素晴らしいシャーマンたちと知り合いました。ハルハのジャンバドルジ・ザイランや、ツァータンのガンゾリク・ザイラン、ダルハドのヨラー・オッドガンなど、ブリヤートだけではなく、いろいろなシャーマンと交流することができましたよ。他民族のシャーマンのことを知るの面白いですね。それに、多くの外国人の友人もできました。もっと英語を勉強しないといけませんね。

23. そうですか。T祭に参加したことがきっかけで友人の輪が広がったのですか？

G：はい。他にはシャーマン、シャーマニズムについての新聞を発行している人とも知り合いま

したし、シャーマンの研究者との出会いもありました。

24. 他の国のシャーマンにも興味がありますか？

日本にもシャーマニズムの伝統があるんですよ。

G：へえ、面白いですね。とても興味があります。日本のシャーマンと一緒に儀式をしたら、どんな感じがするでしょう？他の国のシャーマンにも、興味を持っています。ネイティブアメリカンのシャーマンについて、インターネットで調べたりしました。

25. 日本のようなよその国でも、儀式をすることはできるのですか？

G：ええ。オンゴッドはどこへでも行くことができますからね。ただ湿気が多くて、太鼓が湿ってしまうようなら、難しいです。きちんと乾かして、いい音を鳴らさないといけないんですよ。この問題さえなければ、土地神、水神というのは共通しているので、儀式を行うことができます。

26. そうですか。日本には除湿機という機械があるので、きっと大丈夫ですよ。ぜひいらしてくださいね。

G：(笑いながら) ええ、機会があればぜひ。面白そうですね。

資料3 ガルバドラフ・ザイランを訪れる相談者たち

A. 病気関係

1. 6本ある指を手術で5本にしたところ、具合が悪くなった子どもをもつ女性。病院へ行ったが、原因不明だった。(2005年11月10日、ユステイの儀式にて。)

→ 6本目の指は土地の神のしるしだった。それを取ってしまったので、土地の神の怒りに触れ、具合が悪くなった。西の方角にある病院に行くといいというアドバイスを行った。

2. 母の病気が原因不明である男性。(2006年8月22日、ガルバドラフ・ザイランの家で儀式を行う。)

→ 儀式を行い、アドバイスをを行った。引越す際に、土地の神にきちんとあいさつの儀礼をしなかったことが原因だった。土地神への処置を行う。

3. 安産祈願の女性。(2006年8月26日、ガルバドラフ・ザイランの家で儀式を行う。)

→ 子どもが無事に生まれるよう儀式のときオンゴッドから祝福を受け、お守りを作った。

4. 子どもに恵まれない女性。

→ 儀式を行い、お清め用のアルヒ(ウオッカ)とガンガ(お香のように焚いて使う干し草)を渡した。するとオンゴッドの预言通り2、3ヵ月後に妊娠した。

5. 精神状態が悪くなり、凶暴になった親戚の男性と知り合いの男性。病院へ行ったが原因不明だった。

→ 儀式を行った結果、シャーマンになるべき運命だということが判明。後に師匠となるシャーマン

マンを紹介した。

6. 意識を失った知り合いのシャーマン、親戚の女性が2人と、知人からガルバドラフ・ザイランのことを聞いた人の子ども。意識を失うという問題を抱えたケースは他にもあった。

→ シャーマンは、呪いをかけられたことが原因だった。儀式で呪い返しを行った結果、翌日意識を取り戻した。親戚の女性1人も同様である。もう1人の親戚の女性は、キリスト教徒にも関わらずシャーマンになるべき運命であるということが判明した。後に師匠となるシャーマンを紹介した。また、子どものケースは脳の病気が原因だった。病院でもっときちんとした診察を受けるように、というアドバイスをを行った。

7. 殴られて入院した友人の男性。

→ 意識がなく重症だったので、儀式を行った。後に意識を取り戻した。

B 商売・金銭関係

1. 仕事がうまくいかないという友人男性。同様のケースは非常に多い。(2006年8月22日、ガルバドラフ・ザイランの家で儀式を行う)

→ 儀式の際お祓いをして、お守りとお清め用のガンガを渡す。

2. 知人に貸したお金を返してほしいという女性。

→ 数珠で占いをして、催促の方法をアドバイスした。

3. 韓国へ出稼ぎにいくので、うまくいくようにしてほしいという男性。同様のケースは他にもたくさんあった。

→ 儀式を行い、お守りを作るなどの処置を行った。

C お祓い・祈祷関係

1. 娘が土地の神の祟りを受けていると、違う人から複数回言われた女性。(2005年11月30日、ガルバドラフ・ザイランの家で儀式を行う)

→ 娘の魂を呼び戻す儀式を行う。土地の神の祟りではなく、シャーマンのような仕事をしている先祖が原因だということを説明した。きちんと先祖をおまつりするように、アドバイスをする。

2. 仕事が上手くいかないので、お祓いをしてほしいという知り合いの男性。

→ 儀式を行い、お祓いを行った。

3. 家を清めてほしいという友人の男性。仕事場をお祓いしてほしいなど、同様のケースは多い。

→ 幽霊がいたので、お祓いを行った。

4. 旅の安全祈願をして欲しいという友人の男性。

→ 儀式を行い、行き先の土地の神に彼を守ってくれるよう祈った。

5. 新しく車を買ったので、お守りのハタク(青い布)をつけてほしいという友人男性。

→ 儀式を行い、ハタクに精霊の力をこめてお守りにした。それを車につけた。

D シャーマン関係

1. 姉がシャーマンになるのを拒んでいる女性。家のオンゴン(信仰対象の人形)を姉の代わりに拜んでほしいという依頼。(2006年9月11日、ユステンテイの儀式にて)

→ ユステンテイの儀式を行った際、一緒に祈りをささげた。

2. 太鼓が壊れたという、シャーマンになったばかりの女性。(2006年9月20日、相談者の自宅

を訪れ処置を行った。)

→ 彼女の代わりに、新しい太鼓に精霊の力を入れて使えるようにした。

3. オボーや、シャーマンの木と呼ばれる神木に、力(命)を入れる儀式を行ってほしい。

→ 現地に行き、儀式を行った。

4. 新しくシャーマンになるので、チャナルを行って欲しいという男性。

→ 2006年は2人の男性シャーマンのチャナルを手伝った。資料5 儀式レポート参照。

E その他

1. 生まれつきの運勢(仕事運)を教えてほしいという友人の男性。その他多数。(2005年11月10日、ユステンイの儀式にて。)

→ 儀式の際にオンゴッドが答えた。大抵の男性が聞く質問である。

2. 前妻が夫の悪口を言いふらすのをやめさせてほしいという女性。(2006年8月26日、ガルバドラフ・ザイランの家で儀式を行う。)

→ 儀式を行い、悪口を封じる処置を行う。

3. 子どもにお守りを作ってほしいという女性。その他多数。(2006年9月17日、親戚の女性宅にて儀式を行う。)

→ 儀式の際、赤い糸や数珠、ペンダントに精霊の力を吹き込んでお守りにした。

4. 裁判で勝ちたいという知り合いの男性。

→ 儀式を行う。翌日、裁判で勝ったという連絡があった。

5. 結婚の時期を教えてほしいという女性。

→ 儀式を行い、オンゴッドがアドバイスをした。

6. 離婚した夫の両親が、自分のことを悪く思っ

て呪いをかけたりしていないか不安に感じている女性。

→ 儀式の際、オンゴッドに質問をする。問題ないという回答であった。

7. 亡くなった父が夢に出てきたという女性。

→ オンゴッドに質問し、死者のメッセージを伝えた。

8. 悪い夢(殺される夢)を見たとき不安に感じている女性。

→ お祓いの儀式を行った。

資料4 ウランバートルでセンター に所属し活動するシャーマンたち

ケース1

エンフバヤル(40歳) 女性 ダルハド族 ゴビ
アルタイ県出身

シャーマン歴3年

〈調査日〉 2006年9月19日

〈センターの名称〉

有名な女性シャーマン ツェグメッド・アグサンの名を冠したシャーマン研究の「オンゴルゴ山」センター ※国から許可を得た宗教 NGO 団体である。税金はかからない。

〈センター設立の目的〉

彼女の考えでは、シャーマンの研究が一番の目的である。彼女自身は人の心に興味があり、心理学を勉強したいと思っている。また、精霊の力というのは、本当に人に影響を与えているのかということなどを調べ、研究するために加わった。シャーマニズムは、科学だと考えている。また、センターがあれば様々な人に来てもらえるため設立した。

〈設立時期〉 2006年4月に設立された。

〈設立者〉

師匠であるチョローンバートル・ザイラン、同じくシャーマンである彼の妻と、彼女の3人で設立した。センターで活動しているのもこの3人である。

〈部屋の様子〉

部屋数は1部屋の広い部屋。殺風景で、机、イス、正面の台にオンゴン(онгон)と呼ばれる信仰対象の人形がいくつも飾られ、太鼓が2つ、先生の儀式の写真が展示されている。この部屋で儀式を行う。日用品を売っている店の2階にある。

〈料金形態〉

金額は決まっていない。その人の気持ち分だけ頂く。治療が出来なかった場合、お金を要求しない。

〈訪れる相談者〉

主に病気の人々、心配事を抱えた人々。病気の治療も行う。アルコール中毒の人々を治療するのは難しい。その人の気持ちの問題だからだ。土地の神の祟りなど、目に見えない力が関係した病気、体の問題の病気は精霊の力を借りて治療を行う。

〈シャーマンになった経緯〉

12歳のころから、幽霊を見るなどシャーマンの兆しはあった。18歳の時にウランバートルへ移住し、学校で農業を勉強する。25歳で出産してから、シャーマンの能力(予知能力など)が開花。35歳の時、意識を失い、ひきつけを起こすなど巫病の症状が現れる。自ら経営していた建設会社も人に任せることになった。病院で精密検査を受けたが、原因はわからず、精神科へ行けと言われる。ラマのところへも行ったが効果はない。ジャンバドルジ・ザイラン(ケース5参照)のところへ行き、儀式を行ってもらったと症状が治まった。その時にシャーマンになる運命だということを知る。ジャンバドルジ・ザイランに弟子入りし、シャーマンについて学ぶが、彼は主に自然神とコンタクトをとるというシャーマンである。そこで、自分の祖先の精霊と関わりを持つため、ブリヤートのシャーマンを訪れ弟子入りした。ところがそれ以降仕事が上手くいかなくなり、半年前に現在の師であるチョローンバートル・ザイランに弟子入りした。彼はダルハドのシャーマンである。その後生活が非常によくなったため、自分はダルハド族であり、祖先の精霊もダルハドだと考えている。

夫を2006年の5月に亡くしたため、現在は子どもと2人暮らしである。センター以外での仕事は行っていない。

〈仕事について〉

占いはしない。軽い質問に対しては、口琴を弾いて精霊から直接アドバイスをもらう。1日に5～6人が受付相談者の平均人数である。非常に疲

れるため、これ以上多くの人をみることは出来ない。儀式の最中は30%程度意識がなくなり、半覚醒状態になる。精霊とは自分でも話し、精霊の言葉(方言あり)、自分の言葉を全て口に出す。聞いている人は区別がつかなくなるため、必ず通訳が必要だ。通訳は師匠の妻の妹が行う。

外国に興味があり、現地で儀式を行ってみたいと考えている。2005年9月7日、8日に韓国のシャーマンと合同で山の信仰儀礼を行った。

ケース2

バルジンナム(71歳)男性 ウリヤンハイ族 ホブド県出身

シャーマン歴?年

＜調査日＞ 2006年9月24日

＜センターの名称＞

和訳：オリヤンハイのシャーマン信仰「ドウス」シンボルセンター

写真1 センターの案内板



2006年9月24日 撮影：藤井

＜センター設立の目的＞

人を助けることが目的である。センターを設立すれば多くの人が訪れ、人助けをすることが出来ると考えたため。

＜設立時期＞ 2002年に設立。

＜設立者＞

バルジンナム・ザイラン本人。その他2、3人

の弟子がいて、通訳などの手助けをしてくれる。

＜部屋の様子＞

3、4地区にある自宅(アパート)の一室。シャーマンの衣装、帽子、儀式の写真などが飾られている。相談用の机と椅子がある。

＜料金形態＞

その人の気持ちのお金を受け取る。お祓いの程度によって、値段は変わらない。

＜訪れる相談者＞

病気、物を失くした、生活を良くしてほしい、学校の勉強が上手く行くように、など。

＜シャーマンになった経緯＞

父、母共にシャーマンの家系。1956年にウランバートルへ来た。専門はメカニックエンジニアである。勉強をし、専門に合った仕事をするためにウランバートルへ移住してきた。社会主義時代は表立って活動することが出来なかった。社会主義終了後(1990年以降)本格的に活動を始めた。シャーマンの家系であり、生まれつきのシャーマンであるため、巫病は経験していない。7代目のシャーマンである。両親からシャーマンについて様々なことを教えてもらった。現在、娘たちと共にアパートで暮らしている。

＜仕事について＞

まず、訪れる人のことを占う。儀式が必要な時は、暦の本で、その人の生年月日から適した日を選ぶ。シャーマンについて本の執筆活動を行っている。チンゲルテイ国際シャーマンシンポジウムに参加。「伝統的な習慣」について発表を行った。他のシャーマンとのつながりはあまりない。大勢で儀式を行わない。シャーマンの儀式は個人的なものだと思っている。田舎の様々な山で山の神を祝う儀礼を行う。ツァーガンサル(29日)には必ず儀式を行っている。ラマ教に対する感情はあまりよくない。

ケース3**ガリンダウ (54歳) 女性****ハルハ族 ゴビアルタイ県出身****シャーマン歴10年**

<調査日> 2006年9月21日

<センターの名称>

天上のシャーマン組合 ※NGO 団体である。

<センター設立の目的>

シャーマンを統一し、シャーマンの権利を守るために設立した。

<センターの設立時期>

2004年に設立された。

<設立者>

ガリンダウ・オッドガン本人による。他に、20人の弟子シャーマンが所属している。だが、田舎で儀礼を行う、大掛かりなお祓いをするなど特別な機会以外は、個別に活動している。通訳が大勢いる。

<部屋の様子>

3 地区のショッピングセンターが立ち並ぶビルの地下1階にある。やや広めの一部屋で、椅子が並んでいる。奥にはシャーマンの衣装などのサヒオスが置かれ、その前にガリンダウ・オッドガンが座り相談に答える。

<料金形態>

普段は、本人の気持ち分の代金を受け取る。だが、大掛かりなお祓いをするときは、10～30万 T g (約10000～30000円) ほどかかることがある。

<訪れる相談者>

1日に平均10人。病気の治療、心配事の相談などをおこなう。

<シャーマンになった経緯>

シャーマンになって10年たつ。ウランバートルに移住して7年になる。田舎で3年間病院の仕事をしていたが、仕事が上手く行かず、体調を崩してシャーマンのもとを訪れる。その際、シャ-

マンになる運命だと知る。病院の仕事と平行して修行を積んできたが、仕事を辞めウランバートルに移住。現在は夫、5人の子どもと共に暮らしている。年金生活で、シャーマン以外の仕事をしていない。

<仕事について>

占いはあまりしない。見て、その人の病気の部分に分かる。シャーマンの一番大切な仕事は、自然神(山の神)に祈ることだと考えている。アメリカ、日本、ロシアなどの研究者が興味を持って訪れた。シャーマンについての本の執筆を考えている。

ケース4**ナラントヤー (30代) 女性 ハルハ族 ウランバートル出身****シャーマン歴1年**

写真2 ナラントヤー・オッドガン



2006年9月24日 撮影：藤井

<調査日> 2006年9月24日

<センターの名称>

モンゴルシャーマンの「天のシンボル」組合

※NGO 団体である。

<センター設立の目的>

シャーマンの習慣を広め、様々な国のシャーマンを研究するために設立された。アジアのシャーマン研究。世界のシャーマンと交流したいと考えている。またシャーマンの権利を守り、人々に本物のシャーマンを紹介することも設立目的のひとつ

つである。

500人ほどのシャーマンが所属しており、その内の約20人がロシア、中国、イタリア、ドイツなどの外国人である。また、シャーマンの道具(衣装、太鼓など)を作っている。メンバーは、民族によって区別しない。ハルハ、ブリヤート、ダルハドなど、様々な民族のシャーマンが所属している。会員のシャーマンたちは、月に1000Tgずつ会費を払う。氏名、シャーマン歴、民族などが書かれた「シャーマン証明書」が発行され、会員はそれを所持している。

写真3 ショッピングセンターの一室にあるセンターの案内板



2006年9月24日 撮影：藤井

写真4 シャーマンの証明書



2006年9月24日 撮影：藤井

<センターの設立時期>

2004年5月から、ここでの活動が始まった。それ以前は、2003年に設立された事務所が文化

宮殿内にあった。

<設立者>

ブリヤートのツェレン・ザイランという有名なシャーマンの弟子たちによって設立された。

<部屋の様子>

3地区のサイハンショッピングセンターの中にある。一室を借りた小さな事務所で、壁一面にシャーマンの写真が展示されている。机、椅子、コンピューターもある。この時ナラントヤー・オッドガンは、同じくシャーマンである夫のガンゾリク・ザイランと2人で部屋にいた。

<料金形態>

人々の気持ちに応じた料金を受け取る。お祓いの難しさに応じて供物の値段は変わるが、自分が受け取る金額は設定していない。貧乏な人、裕福な人を区別しない。

<訪れる相談者>

病気の人、心配事を抱えた人々。

<シャーマンになった経緯>

13歳のころから意識を失う病気にかかる。だが、普通に成長し、エルゲルセンターという所で書記の仕事を行っていた。ところが、生活が上手く行かず、意識を失う病気もよくならなかったため、後に師匠となるシャーマンのもとを訪れる。

彼女自身シャーマンについての知識は少なく、いい感情を持っていなかったため、シャーマンになる運命だと知った時は非常に驚いたそうである。シャーマンになってまだあまり日は経っていないが、仕事は上手くいくようになり、意識を失くす病気も治まっている。

シャーマンは副業で、別に健康食品の販売関係のビジネスを夫と行っている。

<仕事について>

儀式を行うのは、各シャーマンの自宅、もしくはは仕事場(サヒオスのある場所)である。この事務所を訪れた人にふさわしいシャーマンを紹介し、一人で手に負えない場合は他のシャーマンと

協力してお祓いをすることもある。その他、外国で儀式を行ったり、外国人のシャーマンが訪れ、共に田舎へ行って儀式を行ったりしている。最近では、モンゴル人が制作しているチンギス・ハーンの映画関係者から依頼があり、儀式を行った。これは映画のシーンを撮影するためではなく、撮影の無事を祈って行われた儀式である。

ケース5

ボヤンバドラフ (21歳) 男性 ハルハ族 ホブド県出身

シャーマン歴3年

＜調査日＞ 2005年12月4日、2006年9月26日

＜センターの名称＞

モンゴルシャーマニズム習慣センター・モンゴルのシャーマンの習慣宮殿 ザイラン・ジャンバドルジ ※ NGO 団体である。

＜センター設立の目的＞

人を助け、天地神と正しく関わりを持ち、害を取り除くために設立した。また、モンゴル人の習慣、伝統を守り伝えることも目的の1つである。

＜設立者＞

ジャンバドルジ・ザイランが設立。シャーマンである彼の娘と、ボヤンバドラフ・ザイランの3人で活動している。その他、20人ほどの弟子がいる。ケース1のエンフバヤル・オッドガンも弟子の1人である。

＜部屋の様子＞

レンガ造りの建物の隣にあるゲルが、仕事場である。カーテンで仕切りがしてあり、カーテンの奥で治療を行っている。カーテンの手前にはベンチが並んでおり、順番を待つ人々が大勢座っている。

＜料金形態＞

ボヤンバドラフ・ザイランは、相談者の気持ち分だけお金を受け取る。他の2人も基本は同じ。

だが、アルコール中毒者、穢れのお祓いなど、やや大掛かりなお祓いが必要な時は5万～10万 Tg (5000～10000円) かかる。

＜訪れる人々＞

病気、不幸が続く、心配事を抱えた人々。気持ちの落ち込んだ人々。

＜シャーマンになった経緯＞

ジャンバドルジ・ザイランとは遠い親戚である。14歳のころ、ジャンバドルジ・ザイランにシャーマンの資質を認められる。自覚的な巫病としては、頭痛、自分でないような怒りの気持ちに支配されることがあった。大学で勉強するため、ウランバートルへ移住。その後ジャンバドルジ・ザイランに師事するようになった。現在、同じく大学生の弟と2人で暮らしている。大学卒業後は、専門の仕事に就きつつ、シャーマンの活動が続けるつもりである。シャーマンの仕事だけで生活してゆく気はない。

＜仕事について＞

彼の場合、9つのコインで占いをする。センターには、ジャンバドルジ・ザイランの元に1日5人から10人の相談者が来る。天の水神、山の神と関係が深い。ボヤンバドラフ・ザイランは日曜日の朝10時から、1時間ほど20～30人のお祓いを一度に行う。お経を聞くような感覚だろうか。今年の夏は、一人で南ゴビを訪れた。山の神に祈るためである。その30年間雨が降らなかったという地域を訪れ、雨乞いの儀式を行った。すると、すぐ後に雨が降ったそうである。その雨の影響で、バヤンザクのとある場所に、17年ぶりに湖が出現したそう。自分でも驚いたと話していた。儀式の最中、自らの意識はほとんどない。自分専用の通訳がいる。

資料5 儀式レポート

＜チャナル＞

チャナルとは、ブリアートのシャーマンが段階的に行う儀式のことである。合計13回行われる。1回チャナルを行うごとにシャーマンとしての力が増し、位が上がる。1年に数回、あるいは毎年続けて行うシャーマンもいるが、命を縮めてしまう。そのためガルバドラフ・ザイランらは3年連続で行い、3年休むというように、26年かけてチャナルを行っている。

- ・実施日 2006年7月30日、31日
- ・場所 ヘンティ県の田舎。新しくシャーマンになるタイワン氏のゲル
- ・参加者 シャーマンは3人だった。タイワン氏、ガルバドラフ・ザイラン、そして彼ら2人の師匠である。その他、師匠の通訳である妻と息子、ガルバドラフ・ザイランの通訳である姉と姉の息子、親戚の子ども、タイワン氏の妻子と親戚の人々など十数名が参加した。年齢や性別など参加者の制限はなかった。

①森から白樺の木を13本切ってくる。9本の小ぶりの木とやや大きめの母の木、父の木、そして背の高い主木、馬木の13本である。木を切る時には飴やアルヒ、ミルクなどを捧げ、必ず土地の神に許しを乞う。

②切ってきた9本の小木を、3×3列に並べて立てる。そして赤、黄色(太陽と月の象徴)青、白(動物の象徴)のリボンを結んで飾る。残りの4本の木は背が高いため、立てる前にリボンを結ぶ。ゲルに近い最も背の高い木が主木だ。主木のすぐ右側が母の木、左側が父の木である。そしてゲルから最も遠くにある背の高い木が馬

写真5 9本の木にリボンを結ぶ



2006年7月30日 撮影：藤井

写真6 羊の毛などで作った鳥の巣



2006年7月30日 撮影：藤井

写真7 主木に吊るす人形



2006年7月30日 撮影：藤井

木だ。主木には、油と羊の毛で作った鳥の巣や、人形の飾りをつるす。リボンや人形は、どれもオンゴッドを歓迎し、目印になるようにという意味を込めて飾られる。

- ③主木など、残りの木を立てる。赤い糸を馬木の頂上に結び、天井を通してゲルの中まで引いてくる。オンゴッドはまず馬木に降り、赤い糸を通してゲルの中に設けられた祭壇へたどり着くという。つまり赤い糸はオンゴッドの通り道になるのである。馬木の前で常にガンガを焚き、清めの煙を絶やさないようにする。

またこの時、一羽の鷲が飛んできた。ガルバドラフ・ザイランによると、その鷲はオンゴッドの化身である。翌日チャナルが終わるまで、ずっと家の近くを飛んでいた。

- ④生贄の羊にミルクを飲ませた後、屠殺し、新しいシャーマンの衣装、太鼓などを仰向けにした羊の上へ置く。オンゴッドに捧げた羊の血で、衣装、太鼓などに力(命)を吹き込むためである。

- ⑤師匠のシャーマンが儀式を行って自らのオンゴッドを呼び出し、新しいシャーマンのオンゴッドが何人いるのか、どのようなオンゴッドなのかを尋ねる。写真9は師匠のシャーマンにオンゴッドが憑依した時の様子を撮影したもの。タイワン氏が自らのオンゴットについて尋ねている。

- ⑥羊を屠殺した後ゆでる。ゆでた肉はオンゴッドの祭壇の前に捧げられる。写真10は祭壇と捧げられた羊を撮影したもの。この祭壇は3人のシャーマンのオンゴッド達のために設けられたものだ。生贄の羊は神聖なものともみなすため、落ちた毛や糞さえもチャナルが終わるまで家の外に捨ててはいけない。

写真8 羊の血で力を吹き込む



2006年7月30日 撮影：藤井

写真9



2006年7月30日 撮影：藤井

写真10



2006年7月30日 撮影：藤井

⑦母木の前に女性(母の象徴)、父木の前には男性(父の象徴)を座らせる。新しいシャーマンが主木の前で歌いながら太鼓を叩き、トランス状態になって精霊を憑依させる。この時は7月30日の夜、そして31日の朝の2度行われた。オンゴッドが憑依しては、また出てゆく。タイワン氏は途中、真っ赤な顔をして嘔吐するなど、非常に苦しそうな様子であった。立ててある13本の木々の間をぬって太鼓を叩きながら何度もトランス状態に自らを追い込んでゆく。ガルバドラフ・ザイランや、師匠のシャーマンが側で太鼓を叩き、歌いながら励ます。参加者の人々も一緒にオンゴッドを呼び出す歌を歌い、時には後ろから追い立てて走る。

⑧チャナルを行った3人のシャーマン達が、オンゴッドに感謝を込め、祈りを捧げる。写真12はその時の様子を撮影したものだ。3人のシャーマンはそれぞれの歌を歌い、感謝の意を込めて、オンゴッドを送り出す。タイワン氏は、まだ少しぎこちない様子だった。

⑨参加者がガルバドラフ・ザイランの指導のもと、立ててあった13本の木を抜く。そして列になって3度家の周りを回ってから、裏の丘へ木を運ぶ。そこで木を焼くのだ。そして最後にタイワン氏が捧げ物を撒く。

<魂を呼び戻す儀式>

今回私が参加したチャナルは、7月30日、31日の2日間にわたって行われた。30日は、タイワン氏がオンゴッドを憑依させるため、チャナルが深夜まで続けられた。そのため、夜の間に魂の抜けてしまった者がいないか、翌朝チェックが行われた。魂が抜けたかどうかは、左右の薬指の長さで分かる。長さが違うと、魂が抜けてしまって

写真11 木々の間を走り回る3人のシャーマン



2006年7月31日 撮影：藤井

写真12 精霊に祈りをささげる



2006年7月31日 撮影：藤井

写真13 ゲルの裏で土地神に挨拶



2006年7月31日 撮影：藤井

いるとみなす。そして魂を呼び戻す儀式が行われる。この時は子どもが1人と、成人男性1人の2人に対して儀式が行われた。ガルバドラフ・ザイランはまずシャーマンの衣装を身につけ、帽子を被る。儀式を受ける人はミルクとガンガの入った杯を右手で持ち、右手薬指とバルダグ(太鼓のばちと一緒に握る、金属の飾りがたくさん付いた棒)を赤い糸で結ぶ。そしてガルバドラフ・ザイランが太鼓を叩き、魂を呼び戻す歌を歌う。

その後、ガルバドラフ・ザイランは杯を太鼓の上に載せ、天に向かって投げる。落ちた杯が表を向けば、魂は無事身体に戻ったという証拠だ。伏せた状態で落ちた場合は、もう一度魂を呼び戻す歌を歌うところからやり直す。写真14、15は子どもの魂寄せの儀式を行っている様子を撮影したものだ。その後、3日間は赤い糸を手首に巻いて、再び魂が抜けないように気をつける。

<ユスンテイと個人的に依頼する儀式>

基本的に、ユスンテイと個人的に依頼する儀式で行うことは同じである。ただ、ユスンテイの場合は全てのオンゴッドを呼び出すため、お供え物が多い。お祓いなどの個人的に依頼する儀式の場合は、呼び出すオンゴッドの数が少ないため、お供え物が少ないという違いがある。

ここでは、2006年9月27日にガルバドラフ・ザイランの自宅で、筆者が儀式を行っていただいた時の様子を記述する。

ガルバドラフ・ザイランと筆者の他、通訳の姉と姉の上の娘が参加した。

①オンゴッドにお供えする祭壇を準備する。太鼓はいい音が出るよう、太陽の光に当てるか火であぶってよく乾かしておく。ガンガとアルツを焚き、ガルバドラフ・ザイランが煙で太鼓を清

写真14



2006年7月31日 撮影：藤井

写真15



2006年7月31日 撮影：藤井

める。また、儀式に参加する人たちも、ガンガの煙で身を清める。相談者(ここでは筆者)は、自分の氏名、民族名と相談内容を紙に書いて、通訳の姉に渡しておく。

②祭壇に向かって太鼓を持ったガルバドラフ・ザイランが椅子に腰掛ける。帽子はまだかぶらず、肩にかける。姉がアルヒの入った小さな杯をガルバドラフ・ザイランに渡すと、彼は太鼓に付いている金属の飾りにかけ、残りを飲み干した。そして太鼓を叩きながらオンゴッドを呼び出す歌を歌う。この際、筆者の名前、民族名も合わせて歌うことで、筆者の産土神を呼び出

した。ガルバドラフ・ザイランによると、産土神は黒い服を着た老人の姿に見えたそうだ。この間、上の娘がアルヒとミルクを杯に入れ、スプーンで毛皮の衣装や帽子についている蛇の飾り、金具、そして信仰対象の人形や仮面の口に注いでゆく。

- ④オンゴッドを招き終えると、少し休憩する。この間オンゴッドは祭壇のお菓子、アルヒなどを食していると考ええる。また、この後オンゴッドを憑依させるため、オンゴッドが座る座布団を用意しておく。

- ⑤例えば病気の相談ならば、白い側(病気の治療を得意とする)のAオッドガン、呪い返しならば黒い側のBザイランというように、相談者の悩みに応じたオンゴッドを憑依させる。筆者の場合は、黒い側の中年男性シャーマンのオンゴッドであった。

ガルバドラフ・ザイランは黒い布でできた帽子を被り、先ほどとは違った早く激しい調子の歌を歌う。身体の揺れが激しくなり、頭を振ってトランス状態に入る。姉や上の娘が彼を取り囲み、椅子を支える。太鼓の叩き方が激しくなり、最高潮に達した時、オンゴッドが衣装の左脇の破れた部分から入る。一回転し、躍り上がるように立った瞬間、彼の意識はなくなりオンゴッドが代わりに歌い出す。

高齢の女性、中年男性などさまざまなオンゴッドがいて、ひとりひとり話し方や態度、様子が異なる。言葉もブリヤート語になり、聞き取りづらい。姉が、太鼓を叩きながら歌っているオンゴッドにあいさつをしながら、座布団まで案内して座らせる。

- ⑥家の者から順にオンゴッドにあいさつする。正座でお辞儀をし、背中をバルダクという、飾り

写真16 オンゴッドを呼び出している時の様子



2005年11月30日 撮影：藤井

の付いた棒で祓ってもらふ。また、オンゴッドの要求に応じてアルヒ、ミルク、タバコ、お茶、お菓子などをふるまう。

その後、筆者が呼ばれた。同様に正座のままお辞儀をし、背中を祓ってもらふ。姉が先ほどのメモを参照しながら筆者を紹介し、悩み事や質問をオンゴッドに伝える。筆者はこのとき、家族の健康と将来の仕事について質問をした。

- ⑦処置を行う。家族について質問すると、オンゴッドは太鼓を小さく叩きながら、耳をすました。時々首をかしげるようにする。太鼓を叩きながら、土地神や位の高いオンゴッドといった存在につながり、答えを得るのである。特に問題はなかったが、誰かの具合が悪くなったらこれで清めるようにとガンガをくれた。

また、筆者は将来の道筋を整えてもらうという処置を行っていただいた。仕事面での希望を話すと、オンゴッドが乳製品やクッキーの入ったお椀を持ってくるように告げた。そして筆者にその中身を、祈りを込めて日本の方角へ撒いてくるよう指示した。その間、オンゴッドは太鼓を叩いて日本の産土神とコンタクトを取り、筆者のことを見守るよう頼んでくれた。空になったお椀をオンゴッドに手渡すと、オンゴッドが

上に向かって放り投げる。お椀が表を向いて落ちた(成功したという意味)ため、お祈りしてから取った。その後、オンゴッドからの祝福を受ける。そして筆者が身につけていた数珠を渡すとオンゴッドが息を吹きかけて、お守りにしてくれた。

- ⑧太鼓を叩いて歌いながら立ち上がり、オンゴッドが帰る準備を始める。通訳の姉や参加者は祭壇の前まで付き添う。また姉は、オンゴッドがガルバドラフ・ザイランの身体から抜け出る前に、「お酒も一緒に持って行ってください。」とお願いする。酔いが残らないようにするためだ。オンゴッドが抜け出る瞬間、ガルバドラフ・ザイランは再び飛び上がる。この瞬間オンゴッドが身体から出て、彼自身の意識が戻る。そして祭壇に向かって一礼する。

- ⑨少し休憩した後、ガルバドラフ・ザイランは再び太鼓を叩きながらオンゴッドを送り出す歌を歌う。太鼓の音色に乗ってオンゴッドが帰ってゆく。

- ⑩参加者が外へ出て、指示された方角へ祭壇にお供えしたお菓子、ミルク、お酒などを撒きにゆく。その際、頭に被り物をしなければならない。ほとんど外に撒いてしまうが、一つの杯に入ったお菓子は儀式の依頼者が食べなければならない。オンゴッドの祝福を受けるためだ。

写真17 サヒオス



2005年11月30日 撮影：藤井

- ⑪通訳者の姉や、上の娘がお供え物のお椀をハタクで拭い、サヒオスを元の場所に片付ける。ゾル(灯燭)だけは、火が消えるまでそのままにしておく。

筆者の場合、燃え終わったゾルの芯の先が丸くなり、めしべのような形になった。ガルバドラフ・ザイランによると、これは儀式が非常に上手だったということを示すそうだ。

<参考文献リスト>

日本語文献

- ・島村一平(2000)、『平原に聴く、シャーマニズムの息吹』『季刊 民族学』93号、国立民族学博物館友の会
- ・鯨岡峻(2005)、『エピソード記述入門—実践と質的研究のために』、東京大学出版会
- ・佐藤正衛(2004)、『北アジアの文化の力 天と地を結ぶ偉大な世界観のもとで』、新評論
- ・ウヴェ・フリック(2002)、『質的研究入門—＜人間の科学＞のための方法論』、春秋社
- ・ミハーイ・ホッパール(1998)、『シャーマニズムの世界』、青土社

- ・ピアーズ・ヴィテブスキー(1996)、『シャーマンの世界』、創元社
- ・ロジャー・ウォルシュ(1996)、『シャーマニズムの精神人類学』、春秋社
- ・井上順孝・編(1994)、『現代日本の宗教社会学』、世界思想社
- ・佐々木宏幹(1980)、『シャーマニズム～エクスタシーと憑霊の文化～』、中央公論社
- ・ウノ・ハルヴァ(1989)、『シャマニズム アルタイ系諸民族の世界観』、三省堂
- ・桜井徳太郎・編(1978)、『シャーマニズムの世界』、春秋社
- ・M・エリアーデ(1974)、『シャーマニズム』、冬樹社
- ・ミハイロフスキー／バンザロフ著 白鳥庫吉／高橋勝之訳(1971)、『シャマニズムの研究』、新時代社

モンゴル語文献

- ・Д.Бямбадорж(2006),"Мөнх тэнгэрийн шашин бөө мөргөл",Улаанбаатар
- ・Д.Бямбадорж(2005),"Бурхан халдун тэнгэрийн тахилга,бөөгийн ёс",Улаанбаатар
- ・Ш.Сүхбат(2005),"Монгол нүүдэлчин ардын шашин шүтлэгийн зан үйл",Улаанбаатар
- ・Ц.Нүүбэл,Б.Төмөр(2004),"Тэнгэрийн элч",Улаанбаатар
- ・А.Оюунтунгалаг(2004),"Монгол улсийн буриадуд",Улаанбаатар
- ・Ш.Сүхбат(2003),"Бөө",Улаанбаатар
- ・С.Бадамхатан(1692),"Хөвсгөлийн цаатан ардын аж байдалийн тойм", Улаанбаатар
- ・Ч.Далай(1959),"Монголын бөө мөргөлийн товч түүх",Улаанбаатар
- ・"Босоо Хөх нөмрөгтөн"(2006 No1,No2)

ウェブサイト

- ・質的研究の部屋 <<http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/4688/index.html>>
- ・質的研究法講座 <<http://web.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ysekigch/qual/qualassess.html>>

- ・平成12年度 経済協力評価報告書
<<http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/h12gai/index.html>>
- ・モンゴル国統計局 <<http://www.nso.mn/>>
- ・Азийн бөөгийн "Тив дэлхий холбоо" <<http://www.owc.org.mn/tivdelhii/golomt/index.htm>>
- ・Roaring Hooves-Mongolia <<http://www.roaringhooves.com/>>

註

- 1) 参考ウェブサイト“Roaring Hooves-Mongolia”
<http://www.roaringhooves.com/> に詳しい内容が掲載されている。
- 2) 2006年9月19日、エンフバヤル・オッドガンのもとを訪れ、ガルバドラフ・ザイラン、筆者の3人で話していた時の証言。
- 3) 資料5参照。
- 4) 2005年11月30日、儀式直後に筆者と2人で話した時の証言。
- 5) 2006年9月19日にガルバドラフ・ザイランと「オンゴルゴ山」センターを訪れ、お話を伺った時の証言。
- 6) 2006年9月24日にガルバドラフ・ザイランと「ドウス」シンボルセンターを訪れ、お話を伺った時の証言。
- 7) 2006年9月24日にガルバドラフ・ザイランと「天のシンボル」組合を訪れ、お話を伺った時の証言。
- 8) 註16に同じ。
- 9) ガルバドラフ・ザイランからの聞き取りによる。
- 10) Д.Бямбадорж(2006),"Мөнх тэнгэрийн шашин бөө мөргөл",Улаанбаатар p.266-267 に掲載。
- 11) Ц.Нүүбэл,Б.Төмөр(2006),"Тэнгэрийн элч",Улаанбаатар p9,p55 のインタビュー参照。
- 12) 2006年7月28日から8月10日にかけてヘンティ県を旅行した。資料5参照。
- 13) 資料5参照。
- 14) グラウンデッド・セオリー法のこと。

(ふじい まよ)